

2010年国際アーカイブズ文化展示会 (IACE2010) 参加記

平野 宗明

アジア歴史資料センター

風間 吉之 ・ 本村 慈

国立公文書館

1. はじめに

2010年6月1日から6日まで、韓国ソウル市の三成洞貿易センター COEX において、2010年国際アーカイブズ文化展示会 (International Archival Culture Exhibition 2010: IACE 2010)¹ が開催された。これまで IACE は、韓国の記録文化の伝統を広く紹介することを目的として、韓国国家記録院の主催で2007年から毎年開催されてきたが、今回の IACE2010は規模を拡大し、韓国だけでなく各国の記録文化及び記録管理情報を紹介するという大々的なものであった。また、会期中には国際セミナーも実施された。

今回の IACE2010について、2009年9月に中国青島で開かれた国際公文書館会議東アジア地域支部 (EASTICA) 総会及びセミナーでは展示会に関するプレゼンテーションが行われ、朴相徳 (Sang Duk PARK) 国家記録院院長から当館館長へ直接の参加・協力依頼があった。翌10月には尹大鉉 (Dai-hyun YOON) 記録管理部長ら一行が、また11月には韓相完 (Sang-wan HAN) 韓国延世大学校名誉教授らが来館するなど、度重なる要請があったことから、当館では IACE2010へ

の参加・協力を決定し、出展資料の準備等を進めてきた。

2. IACE 開会式・国際セミナー

IACE の開会式は、1日 (火) 午前11時より、COEX A 1ホールで行われた。会場である展示ホールの中央に設置されたステージでは、伝統楽器の演奏とともに国家記録を納める朝鮮王朝時代の儀式が再現された。開会式には孟亨奎 (Hyung-kyu MAENG) 行政安全部長官らが参加したほか、潘基文 (Ki-moon BAN) 国連事務総長がビデオメッセージを寄せるなど、韓国国内でのアーカイブズに対する注目度の高さをうかがい知ることができる華やかなセレモニーであった。

国際セミナーは1日 (火) から2日 (水) にわたって開催された。セミナーテーマ「記録遺産、アーカイブズ、技術 (Documentary Heritage, Archives, and Technology)」の下、「アーカイブズ文化：記録遺産のルネッサンス」、「変化する時代のニーズを満たすアーカイブズ機関の役割」、「アーカイブズ管理技術の今日の動向と将来展望」の3つのセッションが生まれ、7か国11名による講演が行われた。参考までにセミナープログラムを文末に掲載した。講演の内容は、基本的には講演者の所属する組織・機関における活動の紹介であった。一部を除き、セミナー登録時に配布

平野 宗明 (ひらの むねあき)

アジア歴史資料センター研究員

風間 吉之 (かざま よしゆき)

国立公文書館公文書専門員

本村 慈 (もとむら めぐみ)

国立公文書館公文書専門員

¹ IACE2010公式ホームページ : <http://iace.or.kr/jpn/main.html> (2010年8月6日参照)

された冊子²に原稿が掲載されているため、ここでは印象の深かった講演のいくつかを紹介する。

基調講演は、ルイス・ベラード (Lewis Bellardo) 博士 (ICA 副会長、合衆国アーキビスト顧問) による「アーカイブズ文化への一般認識を喚起するアメリカ国立公文書記録管理院 (NARA) の戦略とアプローチ」である。講演の主題は、アクセスの提供、市民のための教育プログラム、社会メディアを通じて世間の議論・参加・協力を促すための努力の3点であった。NARAの戦略計画や2009年12月のオバマ大統領による「開かれた政府 (Open Government)」の命令についての説明のほか、「壁のないアーカイブズ (Archives without Walls)」構築のための情報のデジタル化と電子記録や、地域公文書館・大統領図書館も含めたNARAのオンライン目録である「ARC (Archival Research Catalog)」、「ERA (Electronic Records Archives)」について紹介された。この講演の中で、ベラード博士は、ARCでは所蔵資料の7割をデジタル化しているということ、また、一般の認識を高めるためのプログラムである「ナショナル・アーカイブズ・エクスペリエンス (National Archives Experience)」や、教師が授業ですぐに使える資料を提供するための最新のウェブサイトである「ドクス・テック (Docs Tech)」を示し、すべての人に情報を与えることが使命であり、国民に理解してもらうことが大切であるということを強調した。

ロス・ギブス (Ross Gibbs) 氏 (オーストラリア国立公文書館長) の講演「変化する時代におけるアーカイブズ機関の戦略的施策」は、本人不在のためマーガレット・ケナ

(Margaret Kenna) 氏による代読で、オープンソフトウェアツールの開発やデジタル化とオンラインアクセスについて紹介したものであった。これらの紹介以外にも、情報公開法の改正による公文書の非公開期間が従来の30年原則から20年原則へと変更されたことや、ホスト国として、2012年にプリズベンで開催予定のICA大会についても報告された。質疑では、当館専門官からオーストラリアで非公開期間を30年から20年に短縮する理由について質問があり、これに対しケナ氏は、変更については数年間議論されてきたが「開かれた政府」を求める政府の意向と合致したためであると回答した。

ソン・ビョンホ (Byoung Ho SONG) 博士 (韓国祥明大学校碩座教授) からは「韓国における電子記録管理技術：動向と将来展望」について講演がなされた。韓国における記録管理史概説、公的文書の記録管理、デジタル形式での情報の流通などについて述べ、国家データベース事業により、政府の多くのシステムを統合して使用できることから成人認証などを容易にした事例などが紹介された。大変熱心なスピーカーで、終了時間を大幅に超過した。質疑では、司会者からソン博士に対して、韓国はIT大国というが、国家がイニシアチブをとって進めてきた分、iPadなどの民間企業主導の技術などは取り込めておらず、その面では遅れているのではないかとの指摘もあった。

3. 展示会

3.1 会場全体について

広い会場は、3つの区画に大きく分けられる。1つ目は「記録展」である。「記録展」は韓国を中心とした世界の記録を展示するものである。2つ目は「記録管理産業展」である。「記録管理産業展」は記録の保存や管理に関する技術を開発・提供する企業の製品やサービスを展示するものである。3つ目は

² 「International Archival Cultural Exhibition 2010 Seminar」(Government Publications Registration No.11 1311153 000122 14)。デビット・リーチ氏の講演のみ掲載なし。

「体験展」である。「体験展」は記録の作成や保存に関する様々な技術を来場者に体験させるスペースである。以下に各展示区画を紹介する。



会場入り口の長蛇の列

3.1.1 記録展 (International Exhibition of Archival Culture and Heritage)

記録展は、さらに3つのエリアに分けられる。「世界記録遺産館 (Memory of the World Hall)」は、ユネスコのメモリー・オブ・ザ・ワールド³に登録された記録を集めたエリアである。テーマ別に原本・レプリカ・動画・写真パネルなどを展示するものであり、特に韓国の「高麗八萬大蔵経」、ドイツのグーテンベルク聖書 (通称「四十二行聖書」) の原本、グリム童話集の原本などを展示したコーナーは、入場待ちの長い行列ができるほどの人気であった。

「国際記録館 (International Archives Hall)」では、国別の展示コーナーを設置し、各国の記録管理機関を紹介し、また主要な記録物を展示するものである。このエリアでは、16か国の国立公文書館のほか、国連、ICA、

³ メモリー・オブ・ザ・ワールド (Memory of the World: MOW / 世界記憶遺産 / 世界の記憶) は、歴史的文書などの重要な記録遺産の保存のため、1992年にユネスコが創設した制度。フランス人権宣言、アンネの日記など現在76か国から193件が登録されている。

EASTICA が出展し、各国・機関を代表する記録と韓国との交流を示す資料の原本やレプリカあるいは写真が展示された。後述する当館のブースもこのエリア内に設置された。

「大韓民国遺産館 (Korean Archives Hall)」では、韓国の記録管理の伝統と発展の紹介を旨として、エンターテインメント、スポーツ、国民生活等の様々なテーマに沿った記録類を展示するものである。フィギュアスケートのキム・ヨナ選手の金メダルや日韓共催のワールドカップの映像を紹介したコーナーは多くの人々を集めるものであった。

3.1.2 記録管理産業展 (International Exhibition of Archival Industry)

民間企業を中心とした展示区画であり、韓国・欧米から出展した67団体が、文書管理や資料保存、媒体変換等の最新のシステム・機材を紹介した。韓国国家記録院も出展し、伝統的な修復技術のデモンストレーションを行ったほか、書庫の一部を再現し、最新技術を活用した管理システムを紹介した。

3.1.3 体験展 (Hands-on Experience and Demonstration)

記録管理産業展に隣接して、約20の団体による子どもたちのための体験学習コーナーが設けられた。紙漉き、竹簡作り、木版印刷、国璽押し、デジタル肖像画などのブースがあり、展示会場で実際に見たものと関連のある内容を学び、記録文化の多様性を体験できるような構成であった。

また、会場の出口付近には大きな白いボードが数枚立てられ、来場者が記録に関するメッセージを色紙に書いて貼る「私が残す小さな記録」という参加型コーナーも用意された。

3.2 国立公文書館ブース

円形に仕切られた国際記録館エリアの端に位置する当館ブースは、他国ブースよりもや

や広いスペースが用意され、収蔵資料の紹介やデジタルアーカイブのデモンストレーションを行った。ブース内は当館の概要を紹介した壁面と資料展示ケースで構成され、概要紹介の壁面展示ではスクリーンが1台設置され、DVDを連続上映した。

展示ケースは壁面をあわせて8ケースが用意された。展示資料については、当館で新たにレプリカ33点を作製して送付し、このうち28点が出展された。韓国側からは事前に、国立公文書館の代表的な収蔵資料と韓国に関連する資料の2種類を出品してほしいとの要望があったため、古書・古文書及び公文書それぞれの分野から検討し、日本語が読めなくても理解できるように図や絵の入った資料や、憲法やオリンピックなど誰でも知っているような事物に関する文書を選んだ。例えば、「日本国憲法」（請求番号：御30168100）や、江戸時代の朝鮮通信使を描いた「視聴草」（請求番号：217 0034）、1929年に開催された朝鮮博覧会の記念写真帖に掲載されたソウル市の全景写真（「朝鮮博覧会記念写真帖」、請求番号：ヨ606 0009）などが選定した資料である。これらの資料は、展示ケースのなかでも注目が集まるよう中央に配置され、立ち止まって熱心に見る者、指をさして話し合っている様子の親子や友人同士、写真撮影する者が特に多かった資料である。また、江戸時代の幼女つゆが父へ宛てた手紙「幼女遺筆」（「視聴草」）はひらがなで書かれていたため、日本語のわかる来場者から内容について度々質問を受けた。他国のブースが写真パネル中心の展示であったのに対し、当館のブースはレプリカ中心であったため、多くの来場者がじっくりと見学していた点が非常に印象的であった。

4. 当館デジタルアーカイブ及びアジア歴史資料センターの紹介

当館ブースに設けた、国立公文書館デジタ

ルアーカイブ及びアジア歴史資料センターの紹介コーナー（以下、「紹介コーナー」という。）ではノート型PCを2台設置し、来場者に対して国立公文書館デジタルアーカイブ及びアジア歴史資料センターの紹介を行った。

紹介内容は次のとおり。

- ・国立公文書館及び国立公文書館デジタルアーカイブの説明
- ・アジア歴史資料センター及びアジア歴史資料センター資料提供システムの説明
- ・国立公文書館デジタルアーカイブの体験操作
- ・アジア歴史資料センター資料提供システムの体験操作

これらの紹介をした来場者の構成は、親子連れ、社会科見学と思しき児童や生徒のグループ、余暇で訪れた青少年、高齢者等と多様であった。

国立公文書館及びアジア歴史資料センターの両施設の説明は韓国語、英語、日本語で対応した。両システムの体験操作では、資料の検索時に入力するキーワードで使用できる言語として、国立公文書館デジタルアーカイブは日本語（英字資料のみ英語によるキーワードが対応可）、アジア歴史資料センター資料提供システムは日本語及び英語を使用して操作を来場者に体験してもらった。

韓国では、世代により韓国語のみを解する者、英語も解する者、日本語も解する者と分かれている傾向にあり、また漢字を解する者も世代により分かれる傾向にある。このため、アジア歴史資料センター資料提供システムにより、実際にPCでの資料閲覧や検索の実行にまで至ったのは、主に英語教育を受けている小中高生や大学生程度の若年層であった。国立公文書館デジタルアーカイブの体験操作では、一般の多くの韓国民にとって言葉の壁が高く、厚いことから、検索の実行にはほとんど到らなかったものの、広く多くの来場者が大判資料等のデジタル画像の閲覧を楽しん

だ。

英語による検索や、まれに日本語による検索ができる人がいても、日韓間の歴史用語・表現の違い等の限界もあり、望む資料になかなか行きつけなくて興味が削がれてしまうこともあった。韓国語による資料検索及び資料情報の提供がなくては、当地の人々の興味を資料画像にまで誘導することは難しいということを感じさせられた。

他に、体験操作に到らなくとも、ノートや携帯電話のカメラ、デジタルカメラで国立公文書館デジタルアーカイブやアジア歴史資料センターの URL をメモする来場者もあった。韓国における歴史資料への興味や学習に対する熱意を感じさせられた場面であった。これらの来場者には、帰宅後などにおいて、インターネットから利用してもらえるようにリーフレットを積極的に配布した。このような来場者はかなり多く、アジア歴史資料センターが用意した韓国語のリーフレットが不足するほどであり、急遽、テーブルに設置した韓国語のポスターを会場担当のスタッフの方（韓国国家記録院のスタッフ）にお願いして A4 判でコピーして貰い、これを配布するほどであった。

尚、紹介コーナーでは、広報用の配布資料をそのそばに置き、より多くの来場者に両施設のデジタルアーカイブを知ってもらうよう努めた。これが功を奏し、両施設のデジタル



デジタルアーカイブをみる子供たち

アーカイブの説明を受けた来場者も多くあったこと、また、最終日の主催側のスタッフによれば、会期中、「国際記録館」エリアでも当館ブースが一番の盛況であったとの談が寄せられた。

5. おわりに

ICA 執行委員会や EASTICA 理事会・セミナーと合わせ、他の国々の国立公文書館を招いての展示会としては初の試みであった IACE であるが、韓国内における関係機関や教育機関、学校などへの働きかけ、テレビ・新聞による報道、CM と多岐にわたる宣伝・広報も手伝い、41,000人に及ぶ来場者を数え、大変盛況なものであった。このことから国家記録に対する韓国国民の関心の高さや社会的な理解を窺い知ることができた。また、このように盛大な展示会が成功裏に終わることができたのも、社会的背景はもとより、韓国国家記録院の関係者や現地スタッフの準備段階から会期終了に至るまでの尽力とホスピタリティ溢れる対応があつてのものに他ならない。

このように、我が国の歴史資料や公文書管理への取り組みを、当初想定していたよりも多くの韓国民に紹介することができたことは非常に大きな成果であった。また同時に、準備段階での活動や現地における運営体制、展示会を成功させるための様々な取り組みと現地スタッフの姿勢など、学ぶべき点も多々あったことも大きな収穫であった。

IACE2010セミナープログラム

6月1日(火)	
11:00~11:40	国際アーカイブ文化展示会 (IACE) 2010 開会式
11:40~12:10	IACE2010展示会開会式 展示会場観覧
14:00~14:30	IACE2010セミナー開会式 開会式典 開会あいさつ: Mr.Sang Duk Park (韓国国家記録院院長) 祝辞: Ms.Nolda Romer-Kenepa (CITRA 担当 ICA 副会長)
14:35~15:20	セッション1 アーカイブズ文化: 記録遺産のルネッサンス 基調講演: Mr. Lewis Bellardo (ICA 副会長、合衆国アーキビスト顧問) 「アーカイブズ文化への一般認識を喚起するアメリカ合衆国国立公文書記録管理院の戦略とアプローチ: 国の役割」
15:20~16:00	講演: Mr. David Leitch (ICA 事務総長、英国) 「記録/アーカイブズの価値を強力に支持する組織としての国際機関の役割」
16:15~16:55	講演: Mr. Herve Lemoine (SIAF 局長、フランス) 「フランスにおけるドキュメント遺産と次世代に伝える国家努力」
16:55~17:35	講演: Prof. Young-Woo Han (梨花女子大学校碩座教授) 「韓国の伝統的な記録文化の継続に向けた措置」
17:35~18:05	質疑応答、討論
6月2日(水)	
09:30~10:10	セッション2 変化する時代のニーズを満たすアーカイブズ機関の役割 講演: Mr. Ross Gibbs (オーストラリア国立公文書館長) 「変化する時代におけるアーカイブズ機関の戦略的施策」
10:10~10:50	講演: Prof. Dr. Angelika Menne-Haritz (ドイツ連邦公文書館副館長) 「ドイツ連邦公文書館の現状と戦略的方向」
11:00~11:40	講演: Mr. Sang Duk Park (韓国国家記録院院長) 「韓国におけるアーカイブズと記録管理の進展」
11:40~12:20	質疑応答、討論
14:00~14:40	セッション3 アーカイブズ管理技術の今日の動向と将来展望 講演: Mr. Dai-hyun Yoon (韓国国家記録院記録管理部長) 「韓国におけるアーカイブズ管理技術の今日の動向と将来展望」
14:40~15:20	講演: Mr. John Frost (ARMA インターナショナル理事長、米国) 「米国におけるアーカイブズ管理技術の今日の動向と将来展望」
15:30~16:10	講演: 高橋 道彦氏 (JIIMA 理事長、日本) 「日本におけるアーカイブズ管理技術の今日の動向と将来展望」
16:10~16:50	講演: Prof. Byungho Song (祥明大学校教授、韓国) 「韓国における電子記録管理技術: 動向と将来展望」
16:50~17:40	質疑応答、討論
17:40~18:00	閉会式